



小林祥子



上沢美咲



中嶋宏太郎



新村宗二郎



秋元辰美

東京大空襲の惨禍を次代に伝える物語

『今の時代だからこそ、
知って欲しい』
海老名香葉子

無惨な戦禍、火の海で、地獄のような中で二十八名の少女たちは与えられた任務を果たすべく、ブレストを放さなかった。きっと体と共に猛火の中で消え尽きたのでしょう。少女たちは愛国精神のまま大勢の人たちと共に行方不明で果てたのです。この苦しみ哀しみに目を覆わず、知り伝えていくことこそ残された者たちの使命だと思います。この少女たちの無惨を、今の時代だからこそ、絶対に知ってほしいと願うのです。

上演呼びかけメッセージ



墨田電話局の慰霊碑

『平和のバトン
——語り継ぐ』

原作者・早乙女勝元さん

下町地区が、一望の焦土となった東京大空襲では、百万人もの罹災者と、十万人もの死者を出しています。犠牲者は主として、女性や子どもたちでした。墨田電話局の娘たちの戦禍はあまりにも悲痛です。その声なき声を引き継いでいくのは、今を生きる私たちから未来の世代への、平和のバトンです。

前進座による上演の成功を期待してやみません。

1945年3月10日
28人の女子交換手たちが、
電話局の一室にて発見された

〈あらすじ〉

舞台は1945年、東京下町の墨田電話局（墨田区石原4丁目）です。ここで電話交換手として働いていた娘たち28名が、3月10日の早朝、一つの黒い塊となって電話局の焼け跡の一室に発見されました。彼女たちは平均年齢17～8歳で、なかには15歳の娘さんもありました。

「死んでもブレストをはずすな!」の命令の下、「通信戦士」として教育されていた彼女たちは、火災の迫る中にも、電話回線を守るため、職場に残り、逃げ遅れ、皆で電話局内の一室に追い込まれたのです。焼け跡に残されたガマぐちの金具の数で人数が確認されたのです。

一夜にして10万人もの一般市民の命を奪った無差別爆撃の残酷性が、娘たちのひたむきな生き様の中に描かれます。

★原作は、東京大空襲をテーマに活動が続けている作家・早乙女勝元さん（民立民営の「東京大空襲・戦災資料センター」名誉館長）。

児童向け絵本（遠藤てるよさん・絵）として、1981年、草土文化から刊行。以後、草の根出版、日本図書センターから刊行され、80回以上も版を重ね長年にわたって読み継がれているロングセラー作品です。

「ブレスト」とは、
電話交換手が装着する送受器
（ヘッドホンとマイクのセット）
のことです。



〈板橋区立文化会館〉

東武東上線「大山」駅 北口から 徒歩約3分

都営三田線「板橋区役所前」駅 A3出口から徒歩約7分

※一般来場者の駐車スペースはありませんので、公共交通機関をご利用ください。